

編集後記

本号は症例集であるので、臓器、疾患ともに統一がなく、後記としては1つの方向性がないので一言では述べにくい。

全部に共通して言えることは、著者らの汗の結晶、経験の深さ、まとめに至る深慮などがありありとみえ、深い敬意を表したい。

胃については複雑なものが取り上げられており、診断では日暮れて道遠しの感を平素から胸中に抱いている者からすれば当然のことかもしれない。

胆管系については、今後技術面で進歩が次々と出てくると思われるが、患者の予後を一層改善したいものである。

腸については、結核の特集号が出たあとであるが、次から次と特殊型というか、まれな型というか、術前診断の困難なものが現れてきているし、今後も出てくるであろう。成書のみではとても追いつかない状況である。

膠原病については、文章では種々述べられているが、消化管との相関を目で見えるものとしてのまとまったものはないのではなかろうか。今後の発展が期待されるし、根気よく1例1例を集めてゆき、多数例で検討する必要がある。

多くの医学者が、食事の欧米化が疾患を多様化、欧米化していると言っているが、この平和な時代にこそ、疾患を複雑化しない方向に向けるべきではなかろうか。食事という物の面と、これから発生すると推察される心の面でも改善の余地は十二分にあると思う。それには、Marshall Klaus 教授の説をもっともっと日本に取り入れるべきであろう。消化器病学も、この教授の説を取り入れて考えなおしてみると、興味が倍加するのではなかろうか。

＜青山 大三＞